

遷移と交錯の場

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授

いとう
伊藤

たけし
毅

メガ・シティ

アヤソフィアや金角湾、ボスフォラス海峡などで有名なイスタンブールは、標準的なトルコ語の発音からすると「イスタンブル」と表記するのが正しいらしい。実際、専門書などではこれを採用しているものが多い。しかし日本では1978年庄野真代の「飛んでイスタンブール」というポップスがヒットしたこともあって、イスタンブールという語の方が馴染み深い。旅行ガイドブックなどにも依然としてイスタンブールが使われているので、ここでは慣例にしたがうことにしよう。

イスタンブールはトルコ共和国最大の都市で人口約900万人、イスタンブール県全体では1300万人に達し、世界屈指のメガ・シティである。トルコの首都アンカラの人口が約350万人程度だからその突出ぶりがよくわかる。

ところで世界で巨大化した都市には、必ずそれ相応の歴史的背景と地理的条件がある。そして都市が巨大化することによって、独特の都市的形質が備わるようになる。その形質は都市文化の洗練であったり、賑わいであったり、多様性であったりするが、いずれにしても地方の小都市では味わえない、巨大都市の醍醐味ともいべきものがある。イスタンブールは、まさにメガ・シティになるべくしてなった都市であって、その魅力は都市の巨大化のプロセスのなかでかたちづくられたものである。

特異点

こういう面白い珍説がある。「日本列島は世界地図の縮図である」と。北海道をアメリカ大陸、本州をユーラシア大陸、四国をオーストラリア大陸、九州をアフリカ大陸に仮に見立ててみると、富士山はエベレスト、

琵琶湖はカスピ海、瀬戸内海は地中海にそれぞれ対応する。そして房総半島が朝鮮半島、伊豆半島がマレー半島、紀伊半島がバルカン半島に見立てられる。瀬戸内海と地中海の共通性はありそうな気がするし、先住民アイヌの住んだ北海道とインディアンの北アメリカの開拓の歴史も似ているように見える。そしてこの珍説にしたがって千年の都・京都の位置を世界地図上に探すと、ちょうどイスタンブールに当たるのである。これはあくまでナンセンスな地図遊びに過ぎないが、日本の臍ともいべき位置にあった京都と、世界地図上でアジアとヨーロッパの境界をまたがるように立地したイスタンブールは、地政学的な特異点にあったということを感じさせてくれる。ちなみに京都を含む京阪神のメガ・シティは人口約1500万人で、大イスタンブールの人口にほぼ等しい。

写真1はイスタンブールの航空写真だが、東側がアジア・サイド、西側がヨーロッパ・サイドと呼ばれ、両者は南北に横たわるボスフォラス海峡で区切られている。

写真1 イスタンブール航空写真





写真-2 ポスフォラス海峡

ボスフォラス海峡の北には巨大な湖・黒海が広がっており、南に行くとマルマラ海を経て地中海に達する。まさに交通の要衝であり、世界地図の臍ともいべき位置にイスタンブールは存在している。そして海の街道となるボスフォラス海峡はイスタンブールにとって中心軸としての役割をになったのである(写真2)。

● 遷移

イスタンブールの都市としての歴史はたいへん古く、紀元前7世紀に遡る。イスタンブールの旧市街は先の写真-1のヨーロッパ・サイド南側マルマラ海に半島状に突き出た部分にあつて、金角湾が切れ込むように半島の北側に入る。古代ギリシアの植民都市ビュザンティオンがまずここに建設され、次いでローマ帝国末期の330年にコンスタンティヌス1世が遷都して、ビュザンティオンをコンスタンティノポリスと改名した。その後1453年のコンスタンティノポリス陥落までビザンツ帝国(東ローマ帝国)の首都として君臨した。

1453年コンスタンティノポリスを陥落させたオスマン帝国のメフメト2世は、都をここに移す。目まぐる

写真3
アヤソフィア

しい支配者の交替にもかかわらず、イスタンブールは東地中海を支配する首都としての性格を維持することになる。しかしオスマントルコは帝国の宗教をイスラム教に改めたため、アヤソフィアをはじめとする多くのコンスタンティノポリス時代のキリスト教教会をモスクに転用するなどの改変が進んだことも事実である。

イスタンブールの地政学的な立地条件のよさは、世界地図がどう塗り替えられようと、支配者にとって垂涎の的であつたに違いなく、政治の遷移、物流の遷移をつねに併呑しつつ成長するメガ・シティの基本的属性がここに刻み込まれたのである。

● 奇跡の建築—アヤソフィア

世界最大級の集中式教会堂にして、イスタンブール最大のモスクであるアヤソフィアはある意味で奇跡の建築といえるかもしれない(写真3)。



写真4 ブルー・モスク

建工事も迅速に着手され、補強のための第2ドームの挿入などの構造補強が徹底して行われるとともに、以前より高い中央ドームが完成した。しかしこのドームもまた10世紀の地震によって大きなダメージを受ける。

このようにアヤソフィアはたび重なる破壊にもかかわらず、つねに蘇生を繰り返してきた稀有な例であって、その複雑な歴史的経緯はこの建築の各所に刻印され、悠久の「時間」という、ふだん目にする事のない要素を可視化させたのである。

1453年、オスマン帝国の支配下に入ったアヤソフィアは、モスクに転用されることになる。アヤソフィア大聖堂に隣接する総主教館が破壊され、内部の十字架が撤去され、メッカの方向を示すミフラーブが加えられるなどの改変が行われたが、内部の変更は必要最低限にとど



写真5 スレイマニエ・ジャミイ

アヤソフィアの前身は、コンスタンティノポリス時代の360年に建設された大教会である。その後2度火災によって焼失したが、そのたびごとに再建され、532年ユスティニアス帝によって始められた再建工事は未曾有のモニュメントを目指すものであった。この工事は高さ41.5メートルに達する巨大ドームを実現するために、あらゆる手だてが講じられたが、構造的に無理があり、しかも550年ごろから頻発した地震の影響もあって、中央ドームのおよそ半分が崩壊してしまう。この再

められたことは注目に値する。オスマントルコはイスラム教を奉じていたが、その建築的介入は驚くほど少なく、既存の歴史的モニュメントに対しては多大な敬意が払われた。そしてアヤソフィアはオスマン帝国においてもっとも格の高いモスクに位置づけられ、継続的な補修工事が行われた。

アヤソフィアの歴史はある意味でイスタンブールの歴史そのものといってよく、激しい「遷移」のなかで継承されてきた奇跡の建築である。

● 交錯する都市文化

メフメト2世はモスクと病院、学校などを複合化させた施設を建設し、アナトリア半島の諸都市からイスラム教徒の富裕層を強制的に移住させる政策をとった。各地区には有力者が設立したモスクが次々と建設され、イスタンブールに新たな要素が加わることになる。イスタンブールの観光名所となっているブルー・モスク(写真4)やスレイマニエ・ジャミイ(写真5)は、オスマン帝国絶頂期のモスクとしていまなおその輝きを失っていない。

オスマントルコはヨーロッパにはないタイプの商業施設を都市に根付かせた。メフメト2世は、後のグランド・バザールの前身となる屋根付きバザールを始めとする商業施設を建設して、商業活動の基盤を整備し

た。イスタンブールの巨大マーケットとしてよく知られるグランド・バザールの前身は1461年に誕生した小さな市場(現、オールド・バザール)に過ぎなかったが、時代とともにどんどん増築を繰り返し、現在5000を越す店舗が密集し、まるで迷路のような空間が現出している(写真6)。このほかにもイエニ・ジャミイの一部を改造したエジプシャン・バザールや路上のバザールなど、町全体が市場の活気によって支えられている。静謐なモスク空間とバイタリティ溢れるバザールという対照的な要素が共存・交錯する世界にこそイスタンブール最大の魅力が存している。

オスマン帝国は、キリスト教徒を排除せず庇護民として保護し引き続き住まわせる一方で、東方正教やアルメニア正教の教会、ユダヤ教のシナゴグなどもそのまま維持されたため、イスタンブールは、ムスリムの

写真6 グランド・バザール



写真7 イスティクラル通り



トルコ人だけでなく、ギリシア人、アルメニア人、ユダヤ人、ヨーロッパ諸国からの商人や使節など、多種多様な人々が住む国際都市としての性格を帯びるようになった。イスタンブールはもともとアジアとヨーロッパの境界に位置しており、文化や東西交易が交錯する地理的条件を有

● 定点としてのトプカプ宮殿

メフメト2世はイスタンブールを首都としてベヤズット地区に最初の宮殿を建設する(現、イスタンブール大学付近)。しかしここにはわずか10年しか住まず、旧市街の岬の突端部分に新宮殿を造営する。この新宮殿がトプカプ宮殿で、トプカプとは大砲の門を意味する。スレイマン1世の代には旧宮殿にあったハレム(後宮)もトプカプ宮殿に移されるようになり、それ以降、オスマン帝国の公式宮殿として、歴代スルタン¹の政治拠点として継承された。本来遊牧民として定住地をもたなかったオスマントルコが都市に定住するようになり、最終的な拠点となり帝国滅亡まで動くことのなかった宮殿が、このトプカプ宮殿なのである。つまりトプカプ宮殿は遊牧王権から都市王権に移行し滅亡していったオスマ

写真9 トプカプ宮殿



写真8 パッサージュ

していたが、オスマン帝国時代にこの性格はさらに増幅され、多くのコスモポリタンが行きかう複合的な都市文化が形成されたのである。

近代には旧市街のみならず、新市街のガラタ地区、ベイオール地区やアジア・サイドのウスクダルなどを取り込みつつ巨大都市への道程を歩み始める。とくに、ベイオール地区ではタクシム広場に通ずるメイン・ストリートのイスティクラル通りに沿ってヨーロッパ各国の大使館、ホテル、レストラン、ショップ、パッサージュなどがたち並び、旧市街とは異なる西欧風のモダンな町並みを楽しむことができる(写真7・8)。

写真-10 新装されたガラタ地区の
集合住宅

ン朝の末路を象徴する記念碑なのである(写真-9)。

トプカプ宮殿は、ボスフォラス海峡と金角湾、マルマラ海に囲まれた、イスタンブール第1の丘に立地し、イスタンブールの全貌を見下ろせる絶好の位置にある。城壁に囲まれた70万平方メートルに及ぶ広大な宮殿内は4つの庭園によってゾーニングされており、会議や謁見のための公式施設、図書館、ハレムが各庭園を取り囲むようにたち並び、全体として一大コンプレックスを形成している。各建築はオスマン朝の粋を集めた豪華な装飾や調度品によって埋め尽くされ、高価な大理石など材料も十分に吟味されたものが使われている。

こうした壮麗な宮殿からわれわれはオスマン帝国の



往時の栄光を偲ぶことができるが、それは頂点を極めた権力者がやがて坂を転がり落ちるように滅亡していくプロセスをも同時に映し出している。華やかな宮廷社会がこの自閉的な空間で繰り返した享樂的な生活が、いかに丘の下の庶民生活とかけ離れていたものであったかは一目瞭然で

ある。オスマン帝国は最後の定点をここに置いたが、それは滅亡への起点であったかもしれない。

● 増殖を繰り返すメガ・シティ

イスタンブールの都市部には1000万人に及ぶ人々が住んでおり、密集市街地固有の問題を抱えている。イスタンブール市は現在マスタープランを策定し、各地区ごとの問題点を洗い出しながら地区再生を目指している。新市街のガラタ地区はその代表例で、歴史的コンテクストを踏まえたうえで、密集市街地を更新し快適な集合住宅を建設する試みが盛んである(写真-10)。

一方、郊外地区には不法占拠で自然形成的にできた居住地が次々と増殖し、イスタンブール市はこれを制御できないまま、インフラやライフラインの整備に追われている。トルコの経済の大部分がイスタンブールに一極集中し、その度合いはとどまるところがない。

イスタンブールの魅力はこうした巨大都市のもつエネルギーからもたらされていることは事実だが、一方で都市への限度を超えた集中は都市の生命そのものを脅かす病巣を増殖させる。3000年に及ぶイスタンブールの都市史の経験が、21世紀に向けてどのような都市をつくるのか注目していきたい。

